

## ◆ 「試行錯誤続く学生」

新型コロナウイルスに関してのニュースは医療系の学生であるため、目を光らせてきた。私もコロナウィルスが流行しているときは大学2回生であったため、大学での講義のオンライン化、課外活動の禁止を体験した。大学とは、勉学に励む場であると同時に中学校や高校では会えない他県の人たちとの交流の場でもあり交友関係をより広げることができる。その中で新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で大学に行くことが出来ず、精神的に困難な状況に置かれる人がかなり増えたと聞く。そのため学生団体を立ち上げることは、精神的困窮、生活的困窮に陥っている学生を救える手段として良いと感じ、情報共有することで、学生同士の交流が深まっていくと感じた。森教授の対面とオンラインの利点の融合は聞き取りずらかった内容の再確認、質問に行きやすいといったメリットがあるが、ずっとオンラインだけだと大学に行くことの意義が失われるのではないかと考える。

記事にある東北大の方と同様、私も入学前に思い描いていた大学生活は送れなかった。医学部の感染対策や制限は当然厳しく、授業や課題に励むほど一人パソコンに向かう日々だった。私はやはり対面でしかできないことがあると思いつつも、オンラインでの受講や交流でも最低限必要な知識や繋がりを得るのに十分だと気付かされた。皮肉にもオンラインという選択肢を選べる環境がコロナによって整えられたが、私はコロナ明けの多様な社会には選択肢として継続させるべきだと思う。オンラインの感染リスクが無いことや対面しなくて良いことを活かし、面会制限のある患者と家族や、入院・療養中の生徒と学校、僻地と都会の医療など、様々な人と場所を繋げていきたい。

私も本資料同様、コロナ禍で講義が完全オンライン化され、特に大学生活の開始から半年間、一度も同級生と会う機会がなかったことが苦しかった。そのため対面講義の再開は、交友関係が築けるという利点を感じたが、同時にオンライン講義の利便性にも気づいた。特に、教科書に沿った内容を講義動画で事前に自身で学習し、課題を解いて講義当日に解説するという形態は、理解しきれなかった部分を講義当日に補える優れた講義方法だったと感じた。当然、実験や研修のように自身で体験する内容は対面で行うのが最善であり、上述のような人との関わりの面でも対面講義は必要であるため、本資料の末尾同様、対面とオンラインとを適切なバランスで組み合わせるべきだと思う。

新型コロナウイルスの影響で、日常生活だけでなく授業形態も大きく変化し、入学してすぐのオンライン授業で戸惑う様子に非常に同情しました。他学部、多学年との交流やサークル活動はおろか、同学年の友人との交流もままならない生活は、非常に孤独で苦痛を感じていました。しかし、そのオンライン授業、対面授業の双方を経験して、各々メリットがあることもわかりました。どんなものでも初めて取り組む物事は不安な要素が数多く存在しますが、触れてみてこそ初めて学ぶことも多いということを改めて感じました。文末に両方のメリットを組合せるとありましたが、オンライン授業は開始されてまだ数年程度であり、それを扱う先生方には高齢な方もふくまれるため、オンライン機能の取り扱い説明等の新しい物事を積極的に取り入れやすくするための環境の調節が必要だと感じました。

私もこの記事の学生と同じ 2020 年 4 月に大学に入学し、1 年生の頃は秋田県でオンライン授業を受けていたため、同級生との付き合いはないに等しかった。そのため、孤独を感じるが多かった。2 年生からゼミが対面で始まったが、それ以外はすべてオンライン授業で、週に 1 回しか大学に通うことはなく、ゼミ生としか交流する機会がなかった。アパートで一人暮らしのままだとメンタルがもたないと思い、私は横浜にいる親戚の家に行ってみることにした。親戚は私をあたたく迎え入れてくれ、居場所を見つけることができたと思えた。私はこの記事の学生のように学生団体を立ち上げるといった大きな行動は起こせておらず、消極的になってしまった時期もあったため、後悔したり自己肯定感が下がることもある。しかし、孤独とストレスを抱える中で親戚の家に行く行動を起こし、今まで学業も継続できているので、あまり自分を責めないようにしたいと思った。

私は、新型コロナウイルスの影響を受けつつも、大学の講義も対面で受けることができ、ある程度の制限の中、サークル活動や課外活動に取り組むことが出来ました。しかし、私も、オンライン授業や自宅待機の際には、ほとんど会話することがなく、友人と顔を合わせることもなかったので憂鬱な日々が続いていました。制限解除後は、学生活動団体の活動に参加したり、ボランティア活動にも参加したりし、学生だからこそできることを行いたいと思い自ら行動に移しました。直近では、廃校を利活用したコミュニティセンターに地域の子どもたちなどたくさんの方を招いて、学生が夏祭りの運営を行いました。学外へのフィールドワークでは、高齢者の方向けのヒアリング調査や子どもたちが集まれる環境、親の方が子育てを少し休憩できる環境づくりなどを実際に地域に出向いて研究しています。就活を目前にし、移り変わる社会に柔軟に対応できるようにしたいです。

私は、新型コロナウイルスの影響で孤独に苦しみながらも新たな交流の在り方を模索することに共感しながらこの記事を読みました。自分も大学一年の時には授業のほとんどがオンライン授業で他人との交流がなく、二年では対面授業が増えてきたものの、他人との交流はグループで行う授業しかなかったため、記事と同様、他人との交流の仕方を模索することが多かったです。また、記事から自分と同じような境遇の方々の現状を知り、新型コロナウイルスによる影響は、過去3年間でこれだけの影響をもたらしていたことを改めて痛感させられました。ですが、この現状を見据えたうえで、動いてくれている方々がいることを知ることが出来ました。自分はこれから就職活動が始まり、多くのインターシップや面接等に参加することになるので、今まで余りできなかった他人との交流・コミュニケーションを積極的に行っていくように心がけていきたいと思いました。

記事を読んで入学時の大学生活を思い出した。学部ごとに行われるガイダンスやほとんどの授業がオンラインで行われ、同じ学年の人との関わりを持つことが少なかった。また私のようにサークルや部活動に入っていない場合さらに関わりが少なかったように感じる。私はAO入試で早めに大学合格が決まり、AO合格者向けの事前講義などを通して情報共有できる友人ができていたため友人関係で困ることはなかった。しかし記事で取り上げられている学生のようにコロナによって友人関係に困ったり、学生時代に取り組んだこと(いわゆるガクチカ)を誇ることができなかつたりすることは大変なことである。私もコロナによる影響を感じさせないような充実した大学生活を目指してこれからも励んでいきたい。

突然のパンデミックの影響により、私たちの大学生活は大きく変化してしまいました。授業はオンラインに移行し、友人や教授との直接的な交流が制限され、新しいオンライン学習環境への適応が求められました。そして次第に、遠隔学習の挑戦に取り組む中で、孤独感やモチベーションの低下といった問題が生まれました。友人との対面でのコミュニケーションやキャンパスでの活動が制限されたため、社交的なつながりや学内外での経験の機会が制限され苦しい思いをした学生もいたかもしれません。しかし、今回の記事の中に登場した大学生の方は、逆にこの時期を新たな学びや成長の機会と捉えていました。学生団体を立ち上げたその行動力に感銘を受けました。だからこそ「自分で動いて初めて仲間ができた」という学びを得ることができたのだと思います。

そしてコロナが5類に移行し、状況が改善するにつれて、徐々にキャンパスでの活動や交流が戻りつつある中で、過去の日常がどれだけ貴重だったかを再認識しました。この記事を読み、困難な状況に対処する柔軟性や、様々な試練に直面しながらも、成長や学びの機会を見出すことができたと思っています。

不要不急の外出は避けること、マスク着用の徹底など、私たちの生活が一変して早3年。行動制限により、夢のような高校生活を謳歌できずに卒業し、大学入学後もオンライン授業やマスク必須で授業に臨む毎日に慣れを感じていた。同級生の顔もまともに知らずに1年が経過し、5月に5類に移行してから、制限が緩和されたが、マスクに慣れた生活により外すことに抵抗があったり、同級生ともあまり交流がなかったため仲の深め方を忘れてりと3年前にできていたことができなくなってしまう。コロナ禍前の生活と現在の生活の変化を考えながら、試行錯誤して生活する毎日が続き、不安を感じている。孤独と向き合った3年は長いようで短く、その空白を埋めることは難しい。今後もまだ試行錯誤は続くが、コロナ禍を経験したから分かったことをもとに、孤独と向き合った3年を糧にし、大学生生活を今よりも充実させていきたい。

新型コロナの影響により、大学生の授業形態は良くも悪くも変化した。講義のオンライン化により、事後学習の充実や、大学生活とアルバイトの両立が可能となった。一方、学習意欲の低下や、学生同士の交流の減少など、様々な課題が浮上した。しかし、私は、対面と遠隔を組み合わせたハイブリット方式の授業形態は、両方の利点を生かすことが出来ると考える。私の大学では、6・7校時はオンデマンド授業となり、それ以外は基本的に対面授業である。時間割表を上手く作成すれば、学業に加えアルバイトや部活動を両立することができ、時間の使い方が効率的になる。コロナにより、以前のような大学生活を送ることが難しくなったが、考え次第では大学生活の満足度を高めることが可能になる。そのため、大学側が授業形態を改善し、学生側は時間の使い方を見直すことが今後求められる。

本学でも対面授業と遠隔授業の併用が行われている。入学当初は9割が遠隔授業であったため他の学生と関わっている実感が得られにくかったが、遠隔授業の利点は、録画を見直して理解不十分な箇所や疑問に思った箇所を何度でも確認することができることだと感じている。しかし、看護を学ぶ上で対面授業は欠かすことはできないとも感じる。看護を学ぶためには、看護師と患者の両方の立場になって考えたことや感じたことが重要であるため遠隔授業でできることには限りがある。特に、バイタル測定や清拭などの看護技術は対面で実際に練習しながら学ぶことで身につくものだと考える。新型コロナウイルスの5類移行により対面で学ぶ機会も増加していくと考えられるため、積極的に学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

私は、中学校3年生の卒業式前に新型コロナが広まり、高校3年間は新型コロナと共に過ごしてきた。体育祭、学校祭、修学旅行、そして部活動の大会、様々な行事が新型コロナによって中止になった。よって、今回読んだ記事は親近感があった。新型コロナによって、これまで当たり前だった生活が当たり前ではなくなり、意欲を失う人々が増えた中で、このような前向きな活動を行ったことは素晴らしいことだと感じる。不自由な生活を諦めるのではなく、その中で方法を見つけていくことの大切さを学んだ。また、早稲田大学の教授が行っている授業方法は私の大学の教授の授業と重なるところがあり、新型コロナによって得たものはマイナスなことだけではないのだと知った。

この新聞記事に書いている通り、私も人生の中で大切な学生時代を奪われました。ちょうど新型コロナウイルスと高校生活が重なり、友達と遊びに行くことが制限され、学生時代最後の修学旅行も叶いませんでした。しかし、まだ授業が対面で行われていた分、良い方で、それ以上に辛いコロナ禍を過ごしてきた大学生が、たくさんいたことをこの記事を通して知りました。もし、私自身コロナ禍に大学生だったら、東北大の狐野さんのように自分自身の居場所を見失っていたと思います。ですが、狐野さんは、そんな中でも自分ができることを探し、同じ大学生の支援に尽力しました。私は、その狐野さんの逆境の中でも自分を含め、誰かのために尽くす姿を将来、自分自身も見習いたいと強く思いました。

この資料を読んで「孤独に苦しんだ」という言葉が心に残った。私は高等学校に入学したタイミングで、新型コロナウイルス感染症の拡大により緊急事態宣言が出た。そして、入学して1か月もしないで学校に行けなくなった。友達もほぼいない状態で入学し、友達作りもままならない状態だったため、これから先の高校生活がとても不安に感じたのを今でも覚えている。一人暮らしだったら、より孤独を感じるだろうと思った。行事も制限があり、わたしの高校3年間は思い描いたものではなかった。コロナウイルスが5類に移行したため大学生活はマスクを外してキャンパスライフを楽しむことができている。まだまだ、油断はできないが6年間の大学生活を充実したものにしたい。